

え ど べ ん だ よ り
Ed.ベンだより



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話/Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL http://edventure.jp/

「女性の生きづらさ」再考・・・教育講演会に向けて

Ed.ベンチャーでは、昨年の教育講演会で「女性の生きづらさ」について取り上げて以降、それぞれの活動の中で、この課題に継続的に取り組んできた。その結果、この問題が非常に深刻で、社会のありかたそのものに直結する事柄として、正面から捉え続けなければならない課題であることをあらためて強く感じた。

現在の日本社会は大きく混迷し、歴史的な転換点を迎えているのかもしれない。その背景の一つとしては、確かに新型コロナウイルスの感染拡大も考えられる。しかし、ウイルスの感染拡大によって生じた社会の混乱の中で、「割を食った」のはやはり女性であった。観光業はもちろん、多くのサービス産業を支えていた非正規女性労働者たちは一瞬にして職を失った。いかばかりかの支援金で、その後の3年を何とか命を長らえた人も多かったのではないだろうか。このように、「女性の生きづらさ」は常に拡大再生産され、「社会の都合の良い装置」として利用されてしまう可能性があるものなのだ。「女性の生きづらさ」は社会のいたるところで構造的に存在しているのである。

そもそも「生きづらい」という声を政治に届けようにも、国会での衆議院議員の女性の比率は約10パーセントでしかない。政治自体がいまだに男性社会として、厳然と存在し続けている。まして、その数少ない女性議員の口から、まるで保守的男性に媚びるかのよう、平気で女性蔑視発言をする言葉を聞く時には、なんともやるせない気持ちになる。新聞紙上で発表されている政治に関する意識調査では、子育てや防衛、環境などに関して、男女別にみれば常に女性の方が厳しい採点を政治に対して突きつけてきた。しかし、それらが政策に生かされることはほぼない。たまに「保育園落ちた。日本、死ぬ。」など単発的に注目された時だけ取り上げられる。(または選挙前ですかね?) 参政権は男女平等でも、政治的機能は男女平等とは言えないようだ。

振り返って私たち学校教育の現場ではどうだろうか。例えばこの頃気になるのが妊娠した女性教師の扱いである。年度途中で産休に入る予定にある女性教師は担任を持ってもらえない傾向がありそうだ。担任を希望しても、特別支援学級や国際教室の担当にされることが多い。これは、年度途中で担任の交代が、学級経営にとってマイナスだという判断によるのだろうか。保護者からの視線が気になるのだろうか。もちろん、特別支援学級や国際教室に対しても「失礼」だろうし、何より「妊娠すれば戦力外通告」といった考えは、女性の立場を貶めていることにしかならない。

こうした根深い「女性の生きづらさ」への、Ed.ベンチャーの1年間通してのアプローチは、「それぞれの個人史から始め、それを共有する」という、今までにない方法を選択した場面が多かった。女性からは、母や祖母について、夫について、職場で出会う女性について、そして自分という女性について語られた。男性からは、母やパートナーについて語られると同時に、男性としての加害性についても語られてきた。

個人史を掘り下げ、その人生の様々な場面に出会った「女性の生きづらさ」体験を、参加者と共有し、そして社会的な視座から捉えなおす作業は、時間がかかる方法ではあったが、それぞれが内に抱えていた「楔」から解放されることでもあった。語る前と後とでは、大きく自分が変わったことを自覚した参加者は少なくない。

2023 教育講演会 (パネルディスカッション)

日時 2023年2月23日(木・祝日)
時間 受付開始 13:00~
パネルディスカッション 13:30~17:30
場所 富士見文化会館1階101号室
神奈川県大和市中央5-2-29
小田急江ノ島線・相鉄線「大和駅」徒歩5分

参加費 一般1,000円 学生500円(高校生以下無料)
申し込み不要ですので、直接会場にお越しください。

今回の教育講演会を企画していただき、Ed.ベンチャーでは「女性の生きづらさ」について様々な観点から議論を促してきました。その議論を通して明らかになってきたこと、「家父長制文化による家庭の束縛」「女性の自立を阻む社会的制度や家庭内での性別役割分業」「性別役割意識の固定化」など、そして、議論の過程で明らかになった課題、その解決策、個人が抱えている問題、自己を振り返り「生きづらさ」を共有することについて、そして、今回の講演会が、「女性の生きづらさ」を共有し、社会的な視座から捉えなおす作業を促していること、今年の教育講演会が、「女性の生きづらさ」の課題を、個人が抱えていることだけでなく、自身の意識によって捉えなおすことを考え、議論の場をお借りしながら、より深く掘り下げていきたいと考えています。

逃れられない問題としての
「女性の生きづらさ」

パネラー

Aさん 20代前半、大学教員。産後7年経過後に子育てに復帰し、女性の生きづらさに関心を持ち、子育て支援活動に積極的に関与

Bさん 40代前半、行政職。子どもの発達障害をきっかけに社会生活で困難を経験し、自身の生きづらさを共有する機会を得た

Cさん 60代前半、専業主婦。専業主婦生活のなかで、子育てや家事の負担の軽減、自身の生きづらさを共有する機会を得た

Dさん 60代後半、社会福祉士。学生時代の経験から、社会生活での生きづらさを共有する機会を得た

Eさん 60代後半、男性。自身の生きづらさを共有する機会を得た

本誌 後記
「教育講演会の開催に向けて」(2022年11月号)、「女性と社会」(2022年12月号)、「女性の生きづらさ」(2023年1月号)、「教育講演会」(2023年1月号)、「教育講演会」(2023年1月号)、「教育講演会」(2023年1月号)

こうした一年間の取り組みを経て、2023年2月23日（祝日）に行われるEd.ベンチャー教育講演会では、昨年度に引き続き「女性の生きづらさ」を取り上げる。今回はパネラーを中心としたディスカッションに、講師と一緒に参加する形で議論を整理し、深めていきたいと考えている。パネラーは、昨年のパネラーの再登板メンバーが多く、この一年の取り組みで何が整理できたのかわかるように話してもらう予定である。講師は東京大学の本田由紀先生。フロアからの発言も大歓迎で、参加者みんなで課題を見つめたいと考える。

それに先立ち、ここでは当日に討論の柱として予測される視点を整理しておきたい。

1 家父長制をひきずる家庭の姿

今回のパネルディスカッションでも報告されるであろう祖父母との同居家族のケースでは、はっきりと家父長制が残される中、男性優位の価値観が徹底されている事実が浮かび上がる。そうした一方、家父長制というはずいぶん古い日本の家制度で、近代的な都市圏での家庭の姿とは違うように思われがちではあるが、近代的と思われる家族の底流にも、その姿が引き継がれているといわざるを得ない。例えば、学校に提出する保護者欄に記入する場合、そのほとんどが父親名が記載されている。保護者を一名に絞って記載することにも問題があるようにも思うが、この父親名が記入されているということは、「家族の代表」という意識があるのではないか。ここは明らかに「家父長制」を引きずるものがある。この背景にある問題が、婚姻における同姓制度だろう。男性の姓を名乗るケースが圧倒的に多いのが現実であり、選択的夫婦別姓は未だ認められていない。こうしたことから、保護者名が女性であると、学校においてはシングルマザーの家庭をイメージすることが多い。女性が家族を代表することは想定から排除されているのだ。

2 女性の自立を阻む社会的制度や家庭内での性別役割分業

家父長制を引きずりながらも核家族化した家庭についてよく言われたのが、「夫は外で働き、妻は家庭を守る」である。この言葉は高度経済成長の日本で多用され、現在の日本社会の基盤意識とさえなっている。

高度経済成長期は、外で働く夫の給与も順調に上昇した。「夫に支払われる給与は、家庭を守っている妻の分も含まれている」と言われ、家族総がかりで経済成長を支えているような幻想が植え付けられた。しかしその後、低成長の時代に入ると、賃金抑制の時代に入る。安価な労働力が求められ、夫の賃金が下がると同時に、女性は、パートや臨時などの安い賃金労働者として産業に位置づけられた。また一方では、正規職員であっても、当然のように男女の賃金格差が現在も続いている。

こうした経過の中で、女性は家庭内労働（家事・育児・地域との付き合い）を以前と同様に担いながら、安価な労働者として働くという、その意味では、以前よりも厳しい状況に置かれているといわざるを得ない。このことは、家庭内での性別役割分業から、社会全体での性別役割分業がより深刻な形で進んでいるといえるのではないだろうか。

3 男性の無意識の加害性

この1年、Ed.ベンチャーで「女性の生きづらさ」を考えるときに重要視したのは、被害性・加害性を自分の体験から語ることである。社会のいたるところに構造的に組み込まれている問題だからこそ、あきらめたように語ることも、他人事として語ることも、自分の当事者性を意識しないで語ることも許されない。そしてこの「語り」のなかで一番困難なのが「男性の加害性」である。いかなる問題に関しても、加害者が自己の加害性を認識することは難しい。男性の優位性の上に、男性は無意識に（またはある程度意識しても気づかないふりをして）胡坐をかいているのである。この実態が意図的に解体されて行かない限り、変革はやってこない。なぜなら、権力関係では男性が優位であるのだから。この問題の本質につながる視点である。

2月23日、教育講演会への皆様のご参加を心からお待ちしております。

【理事の一言】本年度、中学生の進路指導に携わる中で、卒業後の進路先の種類の多さに驚いている。生徒の将来はこんなにも多様に広がっている。中学校はその多様性を受け止めきれているのだろうか。そして、多様な子ども一人ひとりと向き合い、社会に巣立つ子どもの力になれているのだろうか…。「自分の思うままに生きなさい」という言葉が無責任な言葉にならぬよう、社会をつくるひとりの人間として、自分に身近な学校から変えていきたい。(HM)